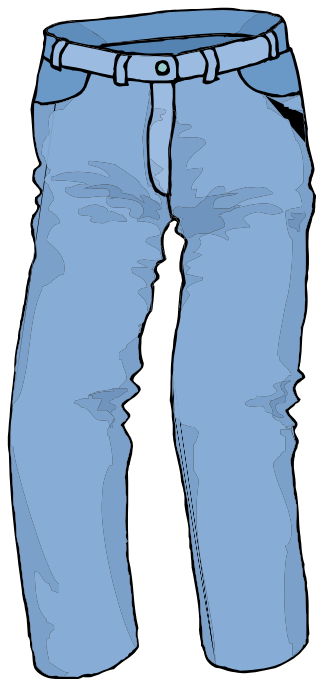
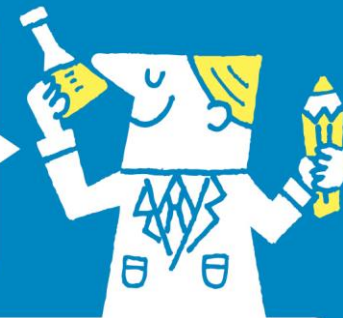


ニッセンケン分室「思いつきラボ」No. 13

Gパン から ジーンズ そして デニムへと…



短期間に同じような話を聞くことはよくありますが、ここ1週間の間にGパンの会話が重なってしまいました。そんな理由(わけ)で今回のテーマはGパンを取り上げたいと思います。1週間ほど前に「Gパンという言い方 あまりしないよね」という会話を耳にしてしまい、Gパン必需品の筆者としては、否定はしないものの作業服としてのGパンについてひと語り、そして数日前に社内研修資料でデニムが綾織の代表として画像が掲載されていてデニムの語源についてひと講釈、さらに翌日FMラジオから、なぜアメリカでは“Jeans ジーンズ”と呼ばれるようになったかという解説が流れてきてこの期間はGパンウィークとなりました。

筆者は1964年頃からのGパン愛好者なのですが、最初はもちろん小学生だったので親が用意したものを穿(は)いていただけですが、それから50年ほとんどの時間をGパンで過ごしています。当時はLevi's(リーバイス)とCANTON(キャントン)というブランドしか知らずとくにCANTONを愛用していました。だいぶ後に知ったのですが、このCANTONブランドは日本製Gパンの創成期の商品だったとのことで、生地はアメリカからの輸入でファスナーとリベットも取り寄せていたとのことです。

間違いなくこの頃は作業着として売られていて“ジェームス・ディーン”が映画で着用して人気になったと言われていました。もちろんホテルやゴルフ場には入れない時代でした。今でも格式のあるゴルフ場やレストランではドレスコードに引っ掛かる服装ではあります。“Gパン”と呼ばれるようになったのは諸説ありますが、ジーニングパンツがGパンになったという説を支持しています。ホワイトシャツがYシャツとよばれるようになったのと似ています。

“Gパン” から “ジーンズ” そして “デニム” へ

“Gパン”から“ジーンズ”になったという話は元々アメリカでは“Gパン”などという呼称はないので“Jeans ジーンズ”が本来の呼び方になります。ではなぜ国内で“Gパン”が“ジーンズ”となったかというときっかけはデザイナーの“カステル・バジャック”氏がファッションにデニム生地を使って話題になったことにあります。作業服のイメージがつよいGパン素材ではファッション用語としては新鮮味に欠けるので、ジーンズとそのまま訳したのが広まったと考えられています。Gパンは作業着でジーンズはカジュアルパンツと区別されたのです。1970年 後半の時期のことです。

今では“デニム”と呼ばれることが多くなっていますが、デニムも新しい言葉でなく本来は生地の名称なのです。生地の名称としてはサージという綾織ですがアメリカに渡っていたのはフランスのニーム地方で織られていたもので「Serge de Nimes」フランス語でセルジュ・ドゥ・ニームと呼ばれていた生地のドウ・ニームがアメリカ読みかたに転じてデニムとなったというのが定説になっています。フランスニーム産のサージだから略してデニムということなのです。

そしてFMラジオから流れてきた“Jeans ジーンズ”と呼ばれるようになった由来ですが 先程のデニムの生地を船に積む港がジェノバ(現在はイタリア)だったそうでジェノバのフランス語読みが“Gênes ジェーヌ”で英語読みになると「ジーンズ」となりスペルも“Jeans”に綴りも変わったという解説でした。デニム生地の別称がジーンズと2つのネーミングがあったのかデニムで作ったパンツをジーンズと呼んだかの詳細の説明がなかったのでもっとしたモヤモヤ感が残っていますが “JEANS ジーンズ”と呼ばれる根拠はここにあったということです。この話は知らなかったので新鮮な驚きになりました。

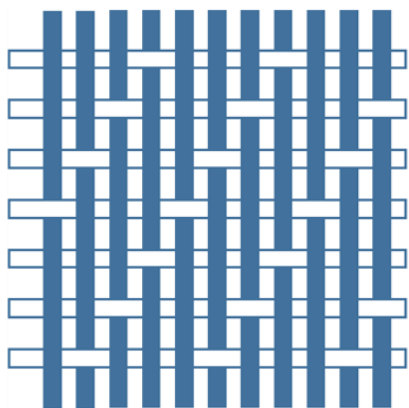
長く愛され続ける “Gパン”

他説もありますので真偽のほどは判りませんが納得のいく解説でした。今のデニムパンツは14oz(オンス)が主流でもっと薄い12oz くらいのももありさらにスパンデックス入りのストレッチデニムも人気があるようですが 作業着としての“Gパン”初期物は16oz か16.5oz が普通でとても厚みのあるものでした。新品はゴワゴワしていてまず洗ってからでないと足に馴染まないものでした。1オンスは28.4g/平方ヤードですので16oz となるとかなり重たいものですが サボテンや虫から身を守るには適応した実用性のあるものになっていました。

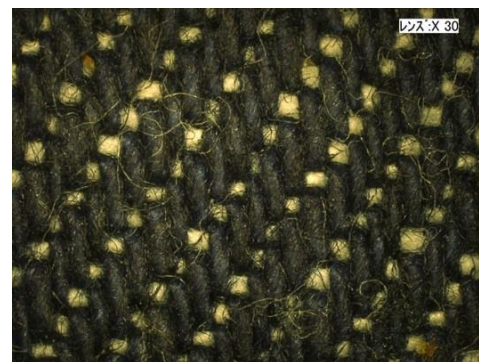
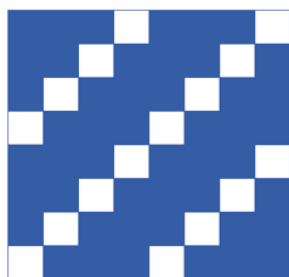


当時はテレビドラマでもアメリカ西部劇時代のものが多く「ララミー牧場」か「ローハイド」か記憶が定かではありませんが 新しいGパンを買った時は新品を穿いたままバスタブに入り 軽石で表面をこすって柔らかくするシーンが映しだされていて 少年であった筆者にはすごくカッコいいものを感じてしまいました。マネをして自宅の風呂で カウボーイ気取りで穿いたまま湯船に浸かって軽石でこすって自分好みの風合いにしたのですが 当時の風呂は木製だったので風呂桶がブルーに染まってしまうました。その時の親の怒りは・・・想像してみてください。我が家の風呂はネイビーブルー・・・。

Gパンの歴史は長いのでいろいろなエピソードもありますがいつの時代でも愛用者が多いのは実用性に優れているからなのです。最後にデニム生地の説明をしておきます。基本的に織組織は3/1のツイル(たて糸3目よこ糸1目の割合で表に出る組織)でたて糸がインディゴブルーの糸染めでよこ糸が生成の白糸で織られています。たて糸が表に多く出ているのでインディゴブルーに見えていて 白く点々で見えるのがよこ糸の白ということになります。インディゴブルーと言いながらヨーロッパでは1900年代前半から合成染料がつかわれていたので本物の藍染のものはさらに古い物になります。



織組織(綾織)3/1ツイルの組織図



デニム生地の拡大写真

今回は“思いいれコラム”

思いつきコラムというように思いついたことを書いていたらまとまりの悪い原稿になってしまいました。Gパンからジーンズそしてデニムと呼び方の変遷はありますが これからも原型のGパンスタイルが変わることがありませんので永続的な商品であることは間違いありません。Gパンが大好きな筆者ですので思い入れが
つよい原稿になってしまいました。今回は思いいれコラムということでご容赦願います。

原稿担当 竹中 直(チョク)

